

学校教育向け「児童用SNS」に必要な機能とその活用条件に関する研究

Research to find out the requirements and guidance policies and functions required to
“SNS for children” that was intended to be used in the school classroom

豊田 充崇

TOYODA Michitaka

(和歌山大学教育学部)

抄録：ソーシャルネットワーキングサービス(Social Networking Service、以下SNS)は、インターネットを利用した情報発信・交流ツールとして社会的な認知を得ていることは疑いがなく、近年では、児童生徒によるSNS利用率も増加している。本研究では、学校教育機関での利用に特化した児童用のSNSを開発し、その試行的な運用をおこなった。児童用SNSを利用した3つの学級の事例を検証することで、児童らの意見交流の活性化、遠隔指導の可能性、実感を伴った情報モラル指導等の成果および担任教諭のSNS活用の意図を捉えることができた。また、これらの実践事例を通して、児童用SNSに不可欠な機能もしくは削除すべき機能を探った。さらに、「児童用SNS」の運用上の条件についても整理した。

キーワード：インターネット、SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)、ネットワークコミュニケーション、情報モラル教育

1. はじめに

1.1 「情報モラル教育」の現状

小・中学生の携帯電話(スマートフォンを含む)所有率や家庭内でのインターネット利用率が上昇し、数多くのネット上のトラブルが増加または低年齢化している現在、学校教育現場は、改めて「情報モラル教育」の必要性に迫られている。

「教育の情報化に関する手引き」(文部科学省2010)の「第5章 学校における情報モラル教育と家庭・地域との連携」においては、「よりよいコミュニケーションや人と人との関係づくりのために、今後も変化を続けていくであろう情報手段をいかに上手に賢く使っていか、そのための判断力や心構えを身に付けさせる教育」が、情報モラル教育として極めて重要であると記述されている。

「情報モラル教育」は、学校裏サイトやネットいじめへの対応、各種のネットトラブルや依存症への対応という側面を色濃くしているが、この手引きには本来の「情報モラル教育」の目的は「情報化の影の部分を理解することがねらいなのではない」との旨が明記されている。「情報社会やネットワークの特性の一側面として影の部分を理解」することは前提としてあるが、主たる目的は「情報社会の特性の理解を進め、自分自身で的確に判断する力を育成すること」であるとして

いる。

既に多くの児童がネットワークコミュニケーションのための各種サービスを利用していることが分かっているが、ここでは多くの「的確な判断」が求められる。

そこで、本研究では、ほとんどの児童生徒がいずれ利用すると考えられるSNSに注目した。SNSを学校教育現場に導入し、適切な指導をおこないつつ、学習活動に活かすことができれば、「情報社会の特性の理解」や、その中で「判断する力を育成」できるのではないかとこの着想によるものである。

1.2 学校教育でのSNS利用

まず、SNSの定義についてだが、「ブログ・SNSの経済効果に関する調査研究」(総務省 情報通信政策研究所 平成21年9月)によれば、「人と人とのつながりを促進・サポートをする機能を持ち、ユーザー間のコミュニケーションがサービスの価値の源泉となっている会員専用のウェブサービス」としている。

SNSの具体的なサービスとしては、Facebookが世界的にみてもその利用者数も多く、広く認知されているが、各種オンラインゲームを含むGREEやMobage、短文メッセージをやりとりするTwitterやLINE等もSNSに分類する場合もあり、広義且つ曖昧な定義であるともいえる。いずれにせよ、児童の実態として、既にSNSでのネットワークコミュニケーションを前提

とした携帯電話(スマートフォン)やインターネット利用が広がりつつあることは間違いない。

これらの状況を踏まえた上で、改めて情報モラル教育の目的を振り返ると、ネット利用に際して「自分自身で的確に判断する力がいかに重要であるかがわかる。こういった力を育成」するためには、自らネットワークを利用した交流や情報発信の経験が必要であり、ソーシャルメディアとしての特性や利点、注意すべき点などを理解するためにも、一定の指導が必要であると考えられる。

本研究では、学校教育用のSNSを開発・運用し、その活用を試行・検証することで、教育現場での情報モラルの育成やネットワークを通じた情報共有・学校間交流の有効性を提案するのが趣旨となる。

2. 本実践研究の目的・方法

2.1 研究目的

児童用SNSの試行版として「きっずコミュねっと」¹⁾を開発し、インターネット上のサーバー運用を2011年11月から開始した。以後3年間の継続的な運用をおこなってきたが、本研究では和歌山県内で中心的に取り組んだC学級を含む3つの学級をピックアップし、ここでの検証結果をまとめる上で、以下の研究目的を設定した。

- ・児童用SNSを用いておこなわれる授業実践や日々の学習活動を捉え、SNS活用の学習形態やその成果、情報モラル指導に関する効果を検証する。
- ・学校教育現場に特化したSNSとして必要な機能を絞り込み、児童の利用に適したインターフェイスや運営上の条件・留意点を探る。

特に、本研究で開発した児童用SNSは、既存のオープンソースシステムを改変・カスタマイズしたものであり、一から学校教育現場での利用を想定して作成されたものではない。

そこで、本研究を通して、学校教育での運用上、必要とされるSNSの機能を探り、次期システム構築への改善点を考察する。

2.2 実践研究の方法

2.2.1 児童用SNSの導入

研究の目的を達成するため、まずは、児童用SNSを開発し、小学校教育現場で活用できる運用体制を構築した(豊田, 2012)。

児童用SNSの基本システムとしては、多くの稼働実績を持つOpenPNE v2.14.9(オープンソース)を基本ベースに、学校教育での利用を想定してプログラムの一部改変およびカスタマイズをおこなっている。

児童用SNSの名称は児童にも親しみやすいように「きっずコミュねっと」として、子ども達のために作られたサイトであることと、ネットワークを通じてコミュニケーションすることをイメージさせた。更に、画面イメージも児童向け・学習用途を想定したものに

変更を加えている。

また、検証用として校内・学級内のみ利用のローカル版と、インターネットを通じて利用できるサーバー版の2種を準備した。サーバー版は独自ドメインを取得して、<http://kidscomnet.jp>からアクセスできる。ローカル版は、linux系のサーバーPCにWebサービスを組み込み、校内LANへ接続することで、学級内での練習用として利用するためのものである。以下①～③に児童用SNSの導入に際してカスタマイズした点および児童用SNS「きっずコミュねっと」の機能一覧を示す。



図1 児童用SNSログイン画面イメージ

①完全事前登録制

事前登録として児童2,000人分のIDを、「e+学校番号+c+学級番号+n+出席番号」という形式で事前設定した。例えばe10c1n10のIDは学校No.10・1組・出席番号10番の児童を意味する。パスワードはランダムで設定し、検証校には必要なIDとパスワードを配布する形式でおこなった。つまり、当SNSはユーザーの「新規登録」や「ユーザーを誘う」類の機能を削除することで、完全にクローズなSNSとして試験的に運用した。

また、事前登録としてコーディネイターの役割を持たせたユーザーを3名分登録した。これは、教育学部学生が担い、児童らの質問や作品評価の依頼に対応するとともに、初期設定の「コミュニティ」のそれぞれの作成者となっている。また、不適切な書き込みを早期発見するためのモニタリング係としての役割も持たせている。

②ユーザー形態の設定

ユーザーの形態は、「フレンド」と「マイフレンド」が存在する。「フレンド」は、SNS内の全児童・教員メンバーを指し、「マイフレンド」は、同一学級内のメンバーとして初期設定してある。つまり、SNSへのログイン後の「マイフレンド」はクラスメイトを指し、「フ

フレンド」は他校の児童を意味している。他校の児童には、「フレンド申請」後に承認されないと「マイフレンド」とはなれない。

このことは、投稿する記事の公開範囲を決める上で重要であり、学級内(マイフレンド)への公開か、SNS内全員(フレンド)への公開かを記事ごとに決めることが可能である。

なお、標準設定では「フレンド検索を可」として、各児童の判断でこのSNS内で他校の児童を検索し、交流ができる体制をとっている。しかし、個人ユーザー単位で「フレンド検索を不可」にして、完全に学級・学校内で閉じた状態での利用も可能である。

③機能一覧

児童用SNSの機能については、SNS構築のオープンソースであるOpenPNE v2.14.9の機能に準じているが、利用が想定されない機能として「レビュー検索・マイレビュー、友達を誘う」は削除した。主な機能は以下の(1)～(4)に大別することができる。

(1)個人機能(図2)

- ・記事投稿機能(マイページエリアに記事を書く。装飾テキストと3枚の写真が登録可能。公開範囲は自分のみ・学級内公開・SNS内全員公開の3段階に設定可能)
- ・プロフィール変更(各ユーザーのプロフィールの登録・変更、アバター画像の設定等)
- ・メッセージ(マイフレンドもしくはフレンドにメールを送信する)
- ・あしあと(自分の記事を閲覧したユーザー名を表示する)
- ・お気に入り(よくやりとりをおこなうフレンドを登録しておく)
- ・マイページ確認(マイページがサイト内でどのように表示されるかの確認)
- ・マイフレンド(現在のマイフレンド登録者の確認。標準設定では学級内全員が登録済み。)

(2)「フレンド」に対する機能

- ・記事を読む(フレンドの記事を読む。マイフレンドでないユーザーの場合は、SNS内全員へ公開された記事のみ読むことが可能)
- ・メッセージを送る(表示中のフレンドにメールを送信する)
- ・お気に入りに追加(表示中のフレンドをお気に入り=よく交流する人として追加する)
- ・フレンドリスト表示
- ・マイフレンドに紹介(マイフレンドに表示しているフレンドの紹介をする)
- ・マイフレンドに追加(表示しているフレンドをマイフレンドに追加する)
- ・紹介文を書く(マイフレンドの紹介文を書く)

(3)「コミュニティ」に関する機能

- ・各コミュニティのトップを表示
- ・掲示板(コミュニティ内でトピックもしくはイベ

ント案内を作成)

- ・コミュニティに参加/退会
- ・マイフレンドに紹介

(4)その他の機能

- ・ランキング(アクセス上位のメンバーや参加人数の多いコミュニティ等を表示する)
- ・最新日記(公開設定されている新しい日記のリストを表示)
- ・各種検索機能(友だち検索、コミュニティ検索、各記事やコメント等からのテキスト検索)



図2 「個人機能」のホーム画面例

2.2.2 実践検証校(学級)について

PCやネット環境が整い検証可能なA学級(4年生、京都府)、B学級(5年生、静岡県)、C学級(5、6年生複式学級、和歌山県)に、以下の共通条件で児童用SNSの活用を要請した。

- ・利用前に機能解説、操作技能習得、プロフィール設定、アバター画像設定等の時間を設ける。
- ・学級内児童の全員が児童用SNSを利用する教科学習を最低1事例は実践する。
- ・できるだけ日常的な活用を促すために学習外の記事の書き込み等も許可する。

各校の担当教員は、ICT活用および情報教育の推進的な立場にある教諭であり、個人としても日常的にSNSを利用している。また、タブレットPCをはじめ各種モバイル端末にも詳しい。また、A、B、C学級ともに教室内に児童一人一台体制のモバイル端末を有する環境があり、各種の基本的なPC操作技能の習得がおこなわれている状況の下で児童用SNSの活用を進めた。

特に、C学級は個人用PC(マイPC)が学級内で利用可能な学校であり、附属教育実践総合センターの「教育の情報化プロジェクト」の一環として取り組んだことにより、教育学部学生が児童用SNS内での交流相手となるなど、恵まれた情報設備環境・人的支援体制の下で長期間の実践を積み重ねてきた。

2.2.3 利用実態の把握及び学習効果の検証方法

児童用SNSの管理者モードを用いて、児童らの記事

を参照し、その利用実態・学習用途を分類し、書き込み内容の把握をおこなった。

更に、検証期間終了後に、各校の担当教員へ下記の項目でインタビューを実施した。

- ・児童用SNS活用による学習効果
- ・児童用SNS活用の際しての指導・配慮
- ・SNSシステム上の改善点

以後、担任からの聞き取りの記述はこのインタビュー結果によるものである。

3. 児童用SNSの利用状況(活用の実際)

3.1 利用実績

児童用SNSは2011年～2014年の3年間の稼働をおこなってきたが、ここではA、B、C学級が並行して利用し、学校間交流の機会も取り入れてきた2013年度中の5ヶ月間を抽出した。その間の利用実績は以下の通りである。

利用ユーザー数：約180(児童用アカウント145、
コーディネイター5、教員30)
アップロード画像数：321ファイル
日記投稿数：584
日記コメント数：1,825
コミュニティピック数：24

児童用アカウントには、検証校以外に配布した試用アカウントを含むために、実質はA、B、C学級合計で63アカウント分を児童が利用した。教員用30アカウントのうち25人分は研修用アカウントである。

よって、児童らの実質のアクティブユーザー数は60人余りであり、平均すると実証期間中に一人当たり約5枚の画像をアップロードし、約9.7回の記事投稿、約29件程度のコメントをおこなっていることとなる。画像を投稿する際には、必ず記事と共に投稿するために、記事投稿の2回に1回は画像を伴った投稿であった。その投稿のほとんどは、授業に関連した画像(実験結果、社会見学の記録等)であるため、記事の半数以上は授業中におこなわれたものと考えられる。なお、それぞれの記事には平均3件のコメントがついている計算となる。

「コミュニティ」については、24のトピックスが作成されているが、この内コーディネイターが5つのコミュニティを初期設定で作成している。例えば、「おすすめの本紹介」や「教室内で飼育している生き物」といったテーマを掲げた。この5つのコミュニティを除けば、その他19のコミュニティは全て授業中に担任から作成が指示されたものであり、グループ利用や映像作品の評価用に設定したコミュニティであった。つまり、実証期間中に児童自らの判断で学習テーマを設定して作成したコミュニティ内のトピックスはなかったといえる。

3.2 活用形態の分類

児童用SNS活用の検証期間中、いずれの学校にも、特にSNSの用途やルールを定めることはせず、各検証校の動向を静観した。よって、比較的自由的な利用状況の中で、担任教員が授業での活用を試みたり、児童らが自然発生的に利用したりした事例が見られた。そこで、児童が投稿した記事(約500)の記述内容を参照した上で、3学級の担任へのインタビューをおこない、児童用SNSの用途をまとめた。その結果、授業中・授業外を合わせて以下の5つの活用形態に分類することができた。

①学級内での意見の共有・交流事例

児童用SNS内に、個人の記事(日記)として意見を投稿し、他の児童がその記事にコメントをつけていく形式で進めた事例。実際の教科学習としては、理科の実験結果の予想・結果の話し合い、国語科では図書室の改造計画の意見交流などが例として挙げられる。普段あまり意見をいわず、発表をおこなわない児童の考え方を引き出すことができ、他者にコメントをするなど、児童の相手意識や個人間の関わりを深める取り組みである。

②他校との交流事例(作品評価)

上記①と手順としては同様であるが、学校間交流相手を「マイフレンド」として登録した上で、双方の作品(地域を紹介する新聞等の画像)や写真等を参照し合ってコメントする形態の活用である。A、B学級が交流し、学級をまたぐ児童間ペアを設定して、お互いの作品を評価し合う活動であった。映像作品(地域紹介CM映像)に関しては、「コミュニティ」を設けて、グループでそのコミュニティに登録して評価コメントをおこなう形式をとった。

いずれにせよ、作品を展示し、評価コメントをつけることで作品の改善点を探ることが目的であり、最終的には、改善した作品を再度アップロードして、以前の改善点の比較を示すこともできた。評価を受けて改善し、さらにその前後を比較するなど、デジタル化された活動の利点が発揮された事例といえる。

③遠隔指導に関する事例

児童作品(例えばデジタル新聞)の内容記述に関しての指導をSNS内のコーディネイターがおこなうといった事例であるが、用いる機能は①②の事例と同様である。例えば、C学級での「地域新聞づくり」に関して、その途中経過の画像を順次SNS内の記事として投稿しておき、コーディネイターが内容記述の評価をおこなった例が挙げられる(図3)。

専門的知識を持った外部支援者がSNSを通じて学習指導をおこなえる可能性を示唆した取り組みであったといえる。



図3 デジタル新聞の投稿とその評価画面の例

④日常的な学校生活を綴る事例

学校間交流に慣れてきた児童らが、給食の画像や学校クイズなどを記事として投稿した事例である。学習的な要素は含まれていないが、自発的な情報発信がおこなったという点で注目したい事例である。

身近な学校生活を他校へ情報発信する際に、日々の給食の様子や、校内の特色ある場所の様子をアップロードするといった点では、一般的なSNSの利用(日常の様子を発信する)と類似した傾向があるといえる。

⑤情報モラル指導へつなげた事例

実証期間中に、特に「情報モラル教育」を意識した取り組みもおこなわれた。ここでは、2つの事例を取りあげる。まず、児童用SNSの「プロフィールの設定」において、児童らに自らの個人情報を意識させたり、その公開範囲を考えさせるなど、当SNSと現実のインターネット利用を対比させながらおこなった事例が挙げられる。ここでは、他者の個人情報をどう扱うべきかについても話し合われている(図4)。

もう1つの事例は、学級内の書き込み内容から不適切な記述を発見した際や、他校と交流する際に気を付けることなど、SNS利用だからこその実体験に基づいた指導がおこなわれていた。A、B学級では、不適切な書き込み(悪ふざけや言葉足らずな書き込み)があった際に、これを頭ごなしに注意するのではなく、

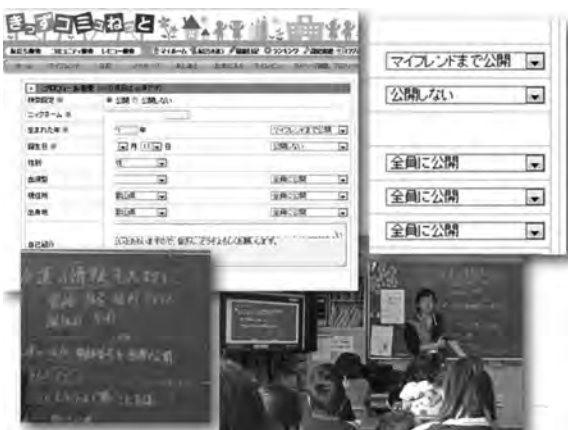


図4 個人情報設定から情報モラル指導への展開例

実体験を伴った情報モラル指導の好機と捉えて「道徳」の授業で取り上げた。その際には、一般的な情報モラル指導用教材(一例として、「ネット社会の歩き方」²⁾)を用いたが、SNSの利用からその教材につなげたことで、現実味を持たせた指導が可能となった。

4. 児童用SNS活用後の考察

4.1 指導上の留意事項や配慮・工夫

A、B学級は、まずは学級内での意見交流の活性化を目指して児童用SNSの活用を開始した。その上で、学校間交流を通じて作品評価や情報モラルの育成につなげていく計画を立てていた。担任自らも教員用アカウントをSNS内に登録して、児童らと交流をおこなっており、対面とネットでの交流との使い分けを模索している様子が伺えた。

A、B学級ともに、ローカル版からサーバー版に移行するなど、段階的に且つ慎重に授業実践を進めた。学級内利用と対外的な利用の使い分けができるために、個人情報の扱いや情報の公開範囲の指導がより現実的におこなえるという利点が挙げられた。

児童らのSNS操作技能は、使用頻度に比例して自然に向上していくが、やはり「情報モラル」に関する指導は、初回だけではならず、継続的な指導を要した。こういった書き込みが問題なのに気付かない児童がいたり、悪ふざけやいたずら行為によって相手はどう感じるかを考えない児童もいる。

よって、「情報モラル」の育成に関しては、きっちりとした指導を継続的に実施する必要がある。操作スキルは活用頻度によって自然に向上するが、一方で活用頻度が上がれば、逆に情報モラル教育の必要性が生じるといった結果となった。

しかし、A、B、C学級それぞれの特色や担任の意図に相違点もある。

まず、A学級は、「実感を伴う情報モラル指導をおこなわない」ために、児童らの記事やコメントには全て目を通すが、多少のふざけた書き込みなどは、児童からの訴えがあるまで放置しておいた。つまり、最初に注意喚起ありきではなく、「不適切な書き込みを児童らが指摘する」というところに重点を置いたといえる。

B学級は、A学級の状況に加えて、最終的に児童の家庭用コンピュータからのログインも許可し、担任教諭自身もSNSの中で児童らひとり一人の記事にコメントをおこなうなど、積極的に関わっていった。これは、常時、記事やコメント等を見ているというアピールを学級の児童らにおこなっていたといえよう。

一方、C学級は、小規模校(複式学級)であるため、閉鎖的且つ固定化した人間関係に広がりを持たせる目的を持っており、異なる地域や異年齢集団との交流によって社会性を育む意図があった。よって、他校や大人(コーディネイターとしての大学生)との交流を前提として開始した。担任は児童用SNSには登録しなかったが、コーディネイターと担当教員が通じているため

に、児童らのネット利用の状況をモニタリングしてくれるという安心感があった。担当教員は、敢えて教員用アカウントでのログインをせずに、児童らの自由な活用を促す場として位置づけ、自立したコミュニケーションを促した。

以上のように3学級の担任のSNS利用の意図・方針は異なっているが、当然ながら児童用SNSは同一設定である。よって、担当する教員の活用意図、指導方針によって、児童らのSNS活用形態やその学習目的にも柔軟に対応できるシステムであるともいえる。逆をいえば、様々なことが可能なSNSであるからこそ、導入段階から計画的な指導方針を固めておく必要があるといえるだろう。

4.2 児童用SNSに必要な機能について

これまで、担任による聞き取り調査と児童用SNS内の書き込み履歴を元に、SNS活用の具体的な事例の分類や、指導者側の意図などについて述べてきた。

まず、先に述べた5つの事例から、実際に使われたSNSの機能を抽出すると、その大部分が個人の「記事作成」とそれに対するコメントによって成り立っており、むしろこの機能のみで先の①～④の事例を遂行することが可能である。

逆に、実践する上で最も不要な機能が、「個人間メッセージ機能(いわゆるミニメール)」という意外な結果となった。情報の共有・交流を目的にしているとはいえ、学級内での個人間メッセージの送受信は不要であり、学校間交流の場合も、個人間のメッセージのやりとりは不要との判断であった。メッセージ交換の必要性があれば、それぞれの記事にコメントすることで可視化できることが望ましいというのが各担任の共通した意見であった。

次に「コミュニティ」についてであるが、このコミュニティという概念が児童には分かりづらいという点が指摘された。「共通のテーマを持ったSNS内のサークル」といっても、小学校の段階で、自発的にコミュニティを作成し、仲間を集め、コミュニティ運用をおこなうのは時間的にも操作の面からも困難なのは容易に予想できる。

確かに「コミュニティ」を作成しての交流事例もあったが、これは担任の指導の下にコミュニティを形成したものであり、自主的な取り組みでは無い。むしろ、各個人が記事の中でなんらかの創作的な作品をアップロードしてそれに他の児童がコメントするほうが、児童には理解しやすいという結果となった。

なお、「マイフレンドに紹介」「紹介文を書く」の機能は一切利用された形跡がないために、SNS機能の精選上、要削除とした。

以上のように、通常はSNSの大きな特徴である「ミニメール」や「コミュニティ」が学校教育向けの児童用SNSには不要であるという指摘があったが、これに代わるものとしては、「ギャラリー機能」や「メッセージ一斉送信機能」が検証校から要望が出された。

「ギャラリー機能」とは、例えば社会見学で撮影した画像を一斉にアップロードしておいたり、各グループで検討したワークシート画像を蓄積するような機能である。学級内で共有した画像を元に記事を書くといった用途があらゆる学習場面で見込まれているという。「メッセージ一斉送信機能」とは、いわゆるTwitterと同様の機能と考えられる。交流メンバー内へ向けた短文のメッセージを一斉送信する機能であり、児童自身が自分の記事を宣伝したり、担任が学習課題を順次提示する際などに利便性が高い。個人を指定してメッセージを送ってもいいが、個人に向けたメッセージであっても学級内の児童が閲覧可能とし、可視化を前提とする。

また、SNSの特性上、個人アカウントでの利用が当然であると考えられていたが、グループアカウントという発想も検討された。学校間交流をグループで担うという場面は意外に多く、個人情報扱いの面でも情報モラル指導の面でも、グループメンバー内で記述内容の確認ができるため、担任が懸念する事項が大幅に低減されるという。

その他、ユーザーレベルは少なくとも、児童・担任・外部サポーター・管理者の4段階は必要であり、担任レベルではグループアカウントの作成もしくは児童らをグループ化する権限が必要である。

その他、担任や児童から外部サポーターに通知する機能(コメントの依頼等)や、リアクションボタン(いわゆる「いいねボタン」)にいくつかの感情表現を選択できるボタンがあれば、学習の励みや動機づけとなるのではないかとの提案もあった。

開発段階で検討された「投稿禁止ワード」のチェック機能については、今回の検証校では特に必要性を感じていなかった。それは、「情報モラル指導の機会を逃すことにもなるから」といった理由であった。つまり、仮に不適切な投稿がなされたとしても、クローズドなSNSであるために、通常は学級内もしくは交流校内で収まり、拡散することはない。

3学級の担任教員には、こういった不適切な投稿は、情報モラル指導の好機と捉え、現実を踏まえたリアルな指導が可能となるのではないかとポジティブな考えを示していただけたといえる。実際にA学級では、「ふざけた書き込み」があった際に、その書き込みについて授業時間を割いてまでも児童らで話し合う機会を設けた場面もあったという。

5. まとめ

児童用SNSを試行的に利用した結果、A学級は児童同士がSNSの使い方を指摘し合って自浄作用を促すことを重視し、B学級は、担任が率先してネットワークコミュニケーションの見本を示すことで児童らの適切な利用方法を導いていった。C学級は、SNS内での児童らの管理を敢えてSNS内のコーディネーター(=教育学部学生)に依頼する形式をとることで、自立心を育

み、学校外の異年齢集団との交流による社会性の向上を意図した。教育用SNSの普及を目指す場合は、こういった具体的な指導方針の例を事前に示すことで、多機能なSNS故に、その活用の目的意識を指導者側と利用者(児童)双方が継続的に持つ必要があるといえるだろう。

本研究において取り上げたこれまでの事例から判断すると、児童用SNSは、児童らに親和性が高く、安全なネットワークコミュニケーションの経験を積み重ねることができていたといえる。各教科での活用事例からも、担任が意図した効果が認められており、SNSの適切な利用自体が、情報モラルの育成にもつながっている。

全体を通して活用されたSNSの機能は、記事の投稿とその記事へのコメントの機能が中心であり、メッセージ(ミニメール)やコミュニティは不要な機能とされた。それに代わるものとして、「ギャラリー機能」や「リアルタイム性のあるメッセージの一斉通知機能」が要望された。その他、特に学校教育向けとして、SNS内コーディネイター(作品評価やコメントをおこなう外部支援者等)の必要性、グループアカウント、リアクションボタン、管理権限のレベル分け等学校教育向けに必要な機能が精選されたといえる。

今後は、本研究によって見出された有効活用事例や運用体制、要・不要な機能の情報を元にして、学校教育での利用に特化したSNSシステムの開発を進める予定である。

6. 今後の展望

本研究における児童用SNSは、担任が学級人数分を申請する事前登録制であり、利用者が限定されている。更に、記事内容のチェックをおこない、児童らの作品に評価コメントを書き込むコーディネイターが存在し、一定の人為的なモニタリング機能もはたらいっている。

よって、C学級のように、担任の指導を離れていても、児童とSNS内コーディネイター間での学習活動を継続することができた。

つまり、初期導入時の労力はかかるが、一定の軌道に乗ることができれば、少ない労力で大きな学習成果を生み出す可能性があると考えられる。

もう一点は、発展的な家庭学習の可能性が挙げられる。A、B学級では、SNSサイトアドレス、IDとパスワード

ドをメモした児童が自宅からのアクセスをおこなうようになった。例えば、「自動車工場調べ」の学習予告をおこなった際に、関連したサイトのURLを自宅から記事として投稿した事例がある。その記事を見た他の児童が紹介されたサイトを参照し、授業が始まるまでに、疑問に思ったことや見学の際に期待することなどをコメントした。これは児童用SNSが、自主的な学習を促し、情報共有・協働的な学びの場となった事例であるといえる。また、担任の教材研究支援を児童自らおこなったとも考えられることから、SNS利用の新しい展望を見出せた事例であったといえよう。

以上のように、児童用SNSは、「授業外での学習活動を支援するツール」としての可能性を持っており、今後は、正規の授業時間以外での児童らの自主的な学習活動を促す仕組みや手立てを検討し、その学習効果の検証も含めた研究が求められるはずである。

注

- 1) (平成27年5月現在)児童用SNSは、<http://kidscomnet.jp>にて運用中である。しかし、事後検証用として稼働させており、実践的な研究・教育現場へのサービス提供は終えている。
- 2) 情報モラル指導用教材 ネット社会の歩き方(CECコンピュータ教育推進センター
<http://www.cec.or.jp/net-walk/>)

参考文献

- 中川一史(2000)、「ネットワークと教育：学びを拓くインターネット」、東洋館出版社
- 嵯峨山和美 久米健司 金西計英 松浦健二 三好康夫 松本純子 矢野米雄(2008)、学生支援キャンパスSNSと学生の動向、日本教育工学会論文誌、32(Suppl.)、53-56
- 佐々木康成 笹倉千紗子(2010)、学習サポートにSNSを用いたコンピュータリテラシ実践の実践とその評価、33(3)、229-237
- 菅原真悟 鷲林潤壺 新井紀子(2012)、情報モラル教育において抽象的概念を扱うための教授法の分析、日本教育工学会論文誌 36(2)、135-146、2012
- 豊田充崇(2012)、学校教育向け児童用SNSの構築と試験的運用に関する報告、日本教育工学会第28回全国大会講演論文集、pp.467-468
- 豊田充崇(1995)、小中学校のネットワークコミュニケーション分析 -『メディアキッズ』プロジェクトの「わいわいクラブ」を通して-、日本教育工学会 研究報告集 JET 95-6、81~88頁